

「森」のモダニズム

伊藤 大介 (建築史家・東海大学国際文化学部教授)



伊藤 大介 (いとう・だいすけ)

1956年東京生まれ。東京大学大学院博士課程修了・工学博士。1984～86年フィンランド・ヘルシンキ工科大学に留学。

主な著書に『アールトとフィンランド』（単著、丸善、1990）、『ヘルシンキー森と生きる都市』（共著、市ヶ谷出版社、1997）、『図説年表・西洋建築の様式』（共著、彰国社、1998）、『北欧インテリア・デザイン』（共著、平凡社、2004）、『近代化の波及』（共著、東京大学出版会、2006）、『北欧学のすすめ』（共著、東海大学出版会、2010）、『北欧の建築遺産』（単著、河出書房新社、2010）、『北欧文化事典』（共著、丸善、2017）、など。

①アールトの新しい舞台、
「森」への接近◆北欧の「自然」の一般的イメージ：
ストックホルムの森の墓地

大学教員という仕事柄、学生たちを連れて北欧の建築や街並みを見て歩くことが多い。最近「北欧」という括りにバルト3国も含めてルートが組めるようになって、訪問先の選択の幅が広がった。帰国後に学生たちに感想を求めることが多いが、常に人気リストの上位に入るもののひとつにストックホルムの森の墓地がある。中世の街並みや歴史的建造物、それに洗練されたデザインの現代教会などに伍してこの墓地が票を集める理由とは、おそらく「北欧らしい自然に触れられるから」といったことなのであろう。確かにここを訪れると、大空の下で心地よい風に吹かれ、あるいは向こうに広がる黒々とした森のシルエットを眺めて、誰もが「北欧」を感じるようになる。

ストックホルムの森の墓地は、スウェーデンのモダニズム建築家グンナール・アスプルンド(1885-1940)が多くをデザインした。活動期のほとんどを占める1915-40年の25年間に関わり続け、墓地の区画と葬礼関連施設群を大きなランドスケープの中にまとめ上げた。この墓地の全体については、その形成過程や各部分の空間的特徴とその意味(土葬と火葬の空間の別)などについてまとめたことがある(拙著『北欧の建築遺産』pp.122-127、河出書房新社、2010)。詳しくはそちらに譲ることにしたい。



ストックホルムの森の墓地(筆者撮影)

それにしても、森の墓地で体験することのできる北欧の自然は見事に美しい。特に墓地に入るとすぐ広がる起伏のある丘の眺めは、近代に人間の手で構成されたランドスケープとして最高の成果のひとつとも評される。さらには、ドイツ・ロマン主義の画家C.D.フリードリヒ(1774-1840)の北方の風景やその抽象化の方法からの遠い影響が指摘されることもある。いずれにせよ、対象となる自然を遠くから眺め、概念化して捉えようとする方向性だと言ってよい。

しかし、北欧の自然との関わり方には別のタイプもある。アールトのマイレア邸以降の住宅作品を追ってゆくと、否応なくそれに気づくことになる。アールトのみずから関わる対象として、美しく整った自然は特に求めない。むしろ、どこにでもありそうな自然を選び、そしてそこに入り込もうとするのである。ここにアスプルンドとアールトの自然観の違いは明らかであろう。連載第2回で触れたように、アールトがアスプルンドから離れてゆくのも、理由はここにあると私は考えている。今回は、アールトが彼なりの自然をどこどのように獲得していったのかを跡づけてみたい。

◆アールトの「自然」との出会い：
森の中の企業労働者住宅地

アールトは、当時の新興都市ヘルシンキに活動拠点を移したのと同じ頃、都市とは別のもうひとつの活動の舞台を得た。それは「自然」という、北欧ではある意味でありふれた舞台であった。

アールトと自然との関わりは、アスプルンドにとっての森の墓地のような大きな計画というだけでなく、それこそ「ごく自然に」始まった。フィンランドらしく、製紙製材産業とのつながりがきっかけとなって、自然は彼の前に登場してきた。

フィンランドのコトカは、輸出港を持つフィンランド東部の地方中核都市である。そのスニラ地区の島に近代的設備を誇るパルプ工場が1937-38年に建設され、戦後1950-53年にも大規模に増築された。これは製紙製材大手5社による共同出資の大事業であったが、その中心となったアールストレム社の経営者ハリー・グリクセンは、この工場の建設を若い建築家アールトに任せたのである。1930-50年代の工業化や戦後復興の時代において、工場建築はフィンランドの社会発展のシンボルであった。

そして、スニラでのアールトの仕事は工場建築にとどまらず、その工場で働く人々のための住宅地の計画へとつながった。1936年以降、管理者用や労働者用のいくつかの住宅タイプやヒートプラントの図面をまとめ、その後全体計画を少しずつ変えながら建設を進めていった。そして、ガレージ・消防署・ランドリー・サウナ・クラブハウスなども作られて、1950年代までに本格的な住宅地が形成されたのである。広い敷地にモダニズムの白い住宅群が点在する風景は、確かにある時代の社会的・建築的理想を体現したものであろう。

そして、こうした住宅地が森の中に開かれたことにも注目したい。アールトはここでフィンランドの全土に広がる建築家の活動の舞台としての「自然」と出会ったのである。それは製紙製材工場に隣接する住環境として特に美しい自然ではなかったかもしれないが、日常生活の場としてこの国のどこにでも存在していたものだった。抽象的・概念的にではなく、現実にもそこにある自然と向き合うことの重要性に気づいた点で、この住宅地がアールトにとってひとつの開眼となったと考えられないだろうか。

②ノールマルックのマイレア邸

◆グリクセンとアールト

フィンランドを代表する大財閥アールストレム社のハリー・グリクセンとアールトの関係は、様々な側面から捉えられる。スニラのパルプ工場の建設だけであれば、企業経営者とその契約建築家といったビジネスライクな関係とも見えよう。しかし実際は、社会的地位や職能の違いを越えてともに社会改革をめざす同志といった、強いつながりを持っていたようである。先端的な社会思想に触れ、労働者の生活環境の改善に早くから目を向けていたグリクセンは、フィンランドでもまだ個々の労働者住居に上下水道を完備することなど考えられなかった時代に、周囲の経営陣の強い反対を押し切ってこれを実現させるべく努力をしていた。

一方、1930年代前半頃のアールトといえ、パイミオやヴィープリで公共建築の設計競技への応募に取り組みむと同時に、モダニストとしての使命感に忠実に大企業に働きかけて、特に工場労働者の生活環境改善につながる提案を繰り返していた。この2人が1936年に出会い、以後長く続く理想的な協力関係を取り結ぶことになったのである。

2人の関係は友人として個人的にも深まってゆく。グリクセンは、アールトの家具制作・販売のためのアルテック社の設立(1935)に出資し、そして次にはハリーの夫人マイレの名を冠した自邸の建設をアールトに託したのである。

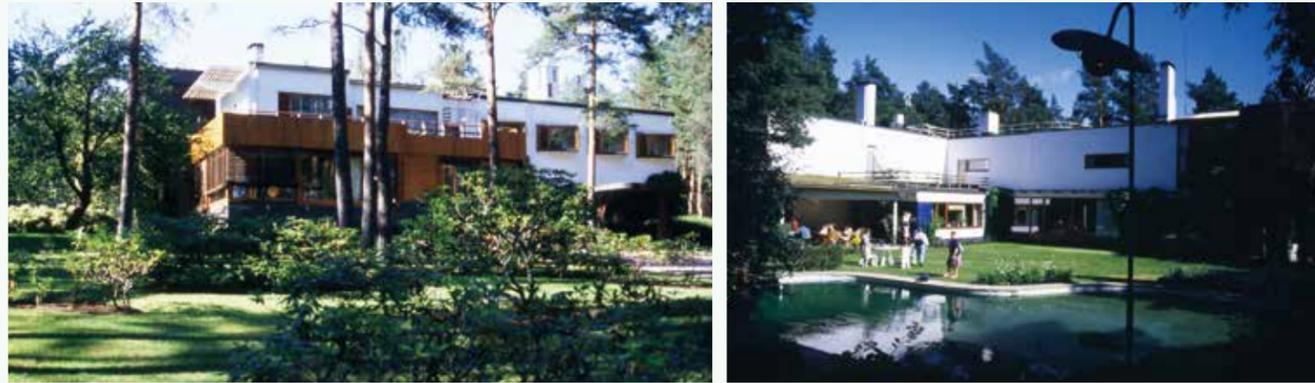
◆マイレア邸の建設

アールストレム社の工場とその関連施設はフィンランド全土に展開するが、その19世紀以来の本拠地にあたるのが西海岸の都市ポリに近い企業城下町ノールマルックである。ここには、企業関連施設群のほか、グリクセン家の歴代の当主がそれぞれの時代の様式で建てた邸宅も残されていた。創設者から3代目にあたるハリーも、1937年にこの地に新しい住まいを作る決心を固め、アールトに設計を依頼した。アールトとしては、予算面でほとんど制約がないという条件を与えられた仕事は初めてであった。

アールトによるマイレア邸のデザインは、何段階かの局面を経たことが知られている。当初アールトは、ノールマルック近郊の川に面した敷地を選んで、そこにF.L.ライトの落水荘のような住宅を作ろうとしたという。落水荘は、ニューヨーク近代美術館での展覧会を通じて世界中に知られるようになったばかりであった。この構想は敷地がノールマルックを離れてしまうため、ハリー・グリクセンに反対されて立ち消えになった。

敷地を現在の場所に定めてからは、まず1938年2-3月頃の計画案がある。この段階から、全体をL字型の平面として、その一方のウイングにリビングを中心とした空間を、他方にダイニングや各種サービス空間を収める構成が基本にあり、庭に置かれたサウナとプールなども含めて実現案の萌芽が見られる。ただし、メインエントランスは下のレベルにあり、主要階に達するために階段を上る必要があった。特にリビング側のウイングには複雑な床レベル差が持ち込まれ、空間的にも庭側の広間と玄関側の書斎に2分されている。住宅のリビングとはいえ、大企業の経営者のそれは接客空間の機能も求められる。ここでは開放的な広間と落ち着いた書斎を別に用意することでこれに対応した。また、美術品コレクターでみずからも絵画を制作するマイレのために、広間の奥にはロフトのようなアトリエが用意され、特徴的なフリーフォームの壁で区切られることになっていた。ほぼ同じ頃にアールトが手がけていた、ニューヨーク万国博覧会フィンランド館(1938-39)の有名なうねる壁を思わせる部分である。

次いで1938年4月に、今日では「プロト・マイレア」と呼ばれる計画案が作成され、上階のプライベート部分が拡張された。一方アトリエは、外側に突出した形で強調されたものの、内部ではうねる壁が断念された。また庭に、別棟で美術ギャラリーが加わることになった。そして、この「プロト・マイレア」案



左上/マイレア邸・アプローチ側 右上/マイレア邸・庭側 左下/マイレア邸・リビング 中下/マイレア邸・リビングのコーナー部分 右下/マイレア邸・リビングの細い柱の林立部分 (すべて筆者撮影)

に沿って建設が動き出したのである。

ところが、基礎工事も始まった1938年5月に、アールトは再びデザインを大きく変更する。複雑な床レベル差を単純化し、エントランスと主要階はほぼ同一レベル（わずかな段差がある）となり、その分住宅全体の接地感が増した。また、広間と書斎の区別が捨てられ、一体化された多目的のワンルームの空間が新たに登場し、そのため別棟の美術ギャラリーが不要となった。グリクセンもこの変更を認め、ようやく最終案が固まったのである。急いで1939年初頭までにすべての図面が用意され、マイレア邸は同年夏の終わり頃ついに完成することになった。ただし、リビングの一体的な空間に関しては、ハリー・グリクセンがあくまでも閉じた書斎を求めたために、大きなリビングの一面を上部が欄間のような可動壁で囲い込む方法をアールトが提案し、今ではこの分割が常態化している。

◆住宅に持ち込まれた「自然」と「北欧」

木漏れ日の森をアプローチして、マイレア邸が見え隠れしてくる様は印象深い。建築の姿を周辺環境になじませているものには、用いられている自然材の質感もあろう。白い外壁の要所には木が張られ、窓サッシやテラスの手すりも木製である。やはり木で構成されている玄関ポーチは、その足元に自然石が敷き並べられている。

一方庭側に回ると、L字をなす住棟とサウナへ続く回廊、そして庭の向こう側を限る雑木林とで、閉じた中庭に近い空間が構成されている。たとえばアスプルンドの森の墓地で味わえたような大きく展開する北欧の自然はここにはない。むしろごく近い自然が扱われ、みずからが自然に入り込み抱かれる感覚になっている。あるいは、ここには北欧農家の伝統である「中庭形式」の配置が応用されていると考えることもできる。北欧の自然の厳

しさゆえの「守られた戸外空間」の有用性を、アールトも体験的に知っていた。伝統からも学ぼうとする姿勢は、アールトのモダニズムの特徴である。

内部では、リビングを中心として大きな空間が屈曲しつつ流動的に連続する。こうした構成については、フィンランドの伝統的家屋にあるトゥパ（居間、食堂、台所、寝室を兼ねた部屋）との関連にアールト自身が言及しており、機能分類ができない多目的な空間への彼の根強い志向が見て取れる。

素材面からは、ここは財閥経営者夫妻の贅を尽くした邸宅でありながら、室内の要所に木や藤、レンガといった素朴な自然材・伝統的建設材が使われ、十分に触感的に柔らかく心地よい。たとえば、リビングにあって上階の床を支えるスチール・パイプの柱には、厚みのある塗装が施された上で手の触れる高さの部分に藤がまかれて、心理的な温かさが

演出される。接客空間としての格ばかりでなく、住まいのくつろぎも生み出されている。

リビングがダイニングへとつながるコーナー付近に、不規則に林立する一群の細い木の柱がある。構造上は必要がなく意匠上のものなのだが、一体何を表しているのかが当初はわからなかった。だが何度か訪れるうちに、これはマイレア邸の敷地を取り囲んでいる雑木林のイメージが、そのまま室内に持ち込まれたものなのだと気づかされた。つまり、ここは室内でありながら、同時に林の中なのである。森林浴をこよなく愛する北欧人のアールトは、そこに身を置く心地よさを住宅のリビングでも実現しようとしている。またここでは、大きな開口部のサッシ全体が取り外しできて、室内が戸外（中庭）と一体としてつながるといった工夫もある。マイレア邸の内部空間はそのまま自然と交流するのである。その扱いの直截さは無造作とさえ言え、まさに「自然のまま」であることに価値がある。

冒頭で言及したアスプルンドの森の墓地の場合と再度比較してみよう。森の墓地の自然は、すべてがコントロールされた配置で、われわれはそれを外から鑑賞する、いわば「愛でる自然」であった。一方アールトのそれは、対象の内側に「棲み込む自然」であろう。この自然との関係の結び結びの違いは、2人の北欧の建築家のあり方の根本的な部分となっている。「北欧性」とは建築を自然と関係づけること、といった単純な理解を超えてより丁寧に捉えてみるなら、アスプルンドは自然を概念化して扱う術を身につけていた、一方アールトは自然の具体的な手触りを建築に持ち込んだ、と言えようか。

マイレア邸は、確実に20世紀の住宅建築の名作のひとつであろう。ヨーロッパ・モダニズムの流れに大きくは沿いつつも、北欧に向き合い、しかもアスプルンドのように建築の北欧的洗練に努めるのではなく、自然との融合によって北欧性を極めようとするアールトのあり方が、ここではっきりと形となっている。

③後期アールトの「森のモダニズム」

◆戦後の住宅作品の例：アールトの夏の家（コエ・タロ）とココネン邸

1930年代末のマイレア邸でひとつの頂点を極めたあと、アールトは戦争の激化によって現実の作品活動の停止をしばらく余儀なくされた。アメリカに拠点を移して規格化平面の研究を行った時期を経て、再びフィンランドで旺盛な活動を開始したのは1950年代頃からであった。

戦後のアールトは、彼自身を取り巻く環境の変化（妻アイノの死、エリサとの再婚も大きかった）もあって、その作品は次第に個人化の様相を強めてゆく。その2つの例として、本人の夏の家とココネン邸を挙げるが、詳しい建設過程などは別稿（拙稿「アルヴァー・アールト主要作品50撰 part1」、『建築文化』1998年9月号p.124 / pp.132-133）に譲り、ここでは基本的特徴のみ述べておく。

ムーラツァアロのアールトの夏の家（コエ・タロ、1952-54）は、中央フィンランド地方の森と湖の風景の中にあり、周囲はほとんど人影を見ることもない深い自然である。長年連れ添ったアイノ夫人が亡くなりエリサと再婚したアールトが、2人の静かな生活のために用意した隠れ家のような住宅である。インテリアの造作なども気楽で、素っ気ないほど簡素である。同じ邸とはいえヘルシンキのそれとは大きく異なり、このコエ・タロでは他人の目を意識しないプライベートな性格が貫かれている。

一方ココネン邸（1967-69）は、晩年も近づいたアールトがごく親しい友人からの依頼にのみ応じて手がけた、一連の森の中の住宅の例である。作曲家ヨナス・ココネン（1921-96）がみずからの創作活動と生活の場として選んだヘルシンキ北郊ヤルヴェンパーは、かつてナショナル・ロマンティシズム文化運動の中心となった芸術家コロニーの地であった。この住宅は大変抑制のきいた表現が特徴で、寡黙で内向的だった作曲家

が本当に求めているものを建築家の立場から理解したアールトが、落ち着いて創作に没頭できる環境を実現させている。

都市から離れることでアールトのモダニズムは地方の自然と一体化して「地域化」したが、戦後になるとそれはさらに「個人化」の様相を深めてゆく。夏の家を経てココネン邸へと、建築としての表現はごくさりげなく、しかし住まいとしての実質はより深まってゆく感がある。

◆アールトの住宅の再評価：「グローバル」から「ローカル」へ進む社会の中で

本誌3回の連載では、住宅作品を通じてアールトの変遷を跡づけた。当初のアールトはヨーロッパのモダニズムに染まり、同時にヨーロッパの歴史の片鱗にも触れて「都市」に身を置くことにこだわった。しかしその後、代わってフィンランドの森に目を向けることで、「自然」とともに自己を確立していった。

現代フィンランドはグローバル化された社会を受け入れた。自国の固有性をことさら強調せず国を開くことを実践して、ITや教育、その他多くの分野で世界のトップランナーの地位を築くことに成功した。そうした中で、この国の建築界も一時アールトの存在の意味を見失いかけた時期があったのかもしれない。しかしフィンランドとは、今もあのサウナ文化が深く息づいている国である。「グローバル」が一步進んで「ローカル（グローバル+ローカル）」と言い換えられ、以前は耳にすることが少なかった「地域」が日常用語となる中で、今またアールトを取り巻く状況は変わってきている。連載初回に紹介した本人の言葉のように「国際的である」が「地方に根ざしているものを欠く」ことのないアールトのあり方は、フィンランドを越えて大きな意味をもつものになってゆくのではないだろうか。（完）